繋いでいく「OnlyOne」

長井市立長井南中学校　三年　安部　真桜

No.1 にならなくてもいい
もともと特別な Only One

これは、母親が好きだったことから私が幼い頃からよく聴いていた歌の歌詞の一部分だ。歌詞の意味など考えずに何度も何度も口ずさんでいた。しかし、小学校一年生のとき、この歌詞の意味を漠然と考える出来事があった。

秋に行われた運動会のまり入れ競技の練習。私は並び順が後ろの方だったので、小学校に併設されている養護学校の女の子と手を繋いで行進することになった。その子と私はお互いに一言も話さなかった。しかし、「上手に歩けるかな？」「まりをちゃんと投げられるかな？」と不安を抱えていた私の手をぎゅっと握りしめて歩いてくれた。私は驚いて思わず女の子の方を見ると、太陽のような笑顔でもう一度強く握りしめてくれ、安心したことを今でもはっきりと覚えている。

そして運動会当日、二人でしっかり手を繋ぎ、笑顔で行進することができた。競技は惜しくも負けてしまい、「No.1」になることはできなかったが、幼いながらそれが全てではないことを知った。運動会が終わって帰るとき、その子が私に手を振ってくれた。私もその子も不安や緊張を抱えて運動会に臨んだ同じ仲間だったことがうれしかった。しかし、私がそのことの本当の意味を知ったのは、しばらくしてからだった。

この出来事があってから、小学生の私はボランティア活動に関心を持ち始め、色々な講話や体験会に参加した。そのなかで様々な障がいを持つ人と関わったり、点字や車椅子の体験をしたりした。そのような体験を通して思ったことがある。それは、「障がいのある人＝特別な人」ではないということだ。苦手なことやできないことがあるかもしれないが、一人一

人喜怒哀楽を感じている。

そして、いつの間にか障がいのある人が健常者と同じように生活することが難しいことは当たり前のことで、特別なことではないという考えが私の中では定着していった。

しかし、中学生になってそんな私の考え方はガラガラと音を立てて崩れていった。私のクラスでは「障がい」というワードが笑いのネタとなり、障がいのある人を侮辱するような発言が後を絶たなかった。私はずっと心の奥のずきずきした痛みを感じながら下を向いて拳を握りしめていた。何が面白いのだろう、どうして笑えるのだろうと思った。そのときふっと手を繋いだあの女の子の笑顔が脳裏に浮かんだ。

確かに、障がいのある人は健常者から見れば「普通」ではないかもしれない。周りの人と比べたらするのが難しいことがあったり、覚えるのがゆっくりだったりすることもあるかもしれない。「みんなと少し違うだけじゃないか」と心の中で叫んでいた。「それはその人の個性なんだ」と私は言いたかった。しかし、周りの目が気になって声にはできなかった。声を上げられない自分が心底悔しかった。

私は今まで、障がいのある人だから助けなければいけない、特別な関わり方をしなければならないと思ったことは一度もない。私が大切にしてきたことは、一人の仲間、同じ社会に生きる人間として接すること、そして、障がいのことや誰がどんな助けを必要としているかを理解し、よく考えて行動に移すことだ。

そもそも「障がい」とはどのような言葉なのだろうか。一般的には、障がいのない人との壁を作るイメージを持たせる言葉かもしれない。しかし、私は「障がい」はその人が心の中に抱えている「助けて」を言葉に表して周りの人に知らせるもの、また、他の誰も持っていないその人だけの「Only One」で唯一無二の個性を表現するための言葉ではないかと思う。「No.1」を目指すことが全てではない。出会っていく一人一人の「Only One」を見つめることで、誰もが幸せに過ごせるのではないか。

No.1 にならなくてもいい

もともと特別な Only One

幼い頃から頭に刻まれてきた「歌詞」という点が、私の思いの点と今繋がって一本の線になった。これからも十人十色の個性を持った人たちと出会うだろう。どんな時も先入観を捨て、その人の心の内を考えられる人になりたい。そうすることで繋がった線が、また他の線と繋がって大きな輪になっていくことだろう。人と人との関わりで作られていく大きな心の輪を大切にして生きていきたい。

私は中学三年生になった今、以前よりも周りを見て困っている人がいないか考えるようになった。しかし、まだ自分の思いを声に出せるようにはなっていない。一人一人の「only One」を繋いでいくためにはどうすればいいのだろうか。私はこれを自分にも社会にも、常に問い続けて生きていく。

※本文中の歌詞は、SMAP「世界の一つだけの花」(作詞・槇原敬之)より引用。